

世田谷区小学校教育研究会道徳部紀要（平成 25 年度～令和元年度）に寄稿した挨拶文より

## 「特別の教科 道徳」誕生当時の実態と問題点

（平成 25 年度）

「特別の教科 道徳」（仮称）のスタートに備えよ！

後藤 忠

暮れも押し迫った 12 月 26 日、「道徳教育の充実に関する懇談会」が文科大臣に対して会議の報告を行った。道徳の教科化についての報告である。

この報告で私が最も注目していた点は、「学校における道徳教育の基本的な考え方や道徳の時間の特質と役割が今までと変わるのか？」という点であった。

そのことについて報告書は、「（現行の道徳教育の考え方は）今後とも重要であり、引き続き維持していくことが適当である。」と結論付けており、安堵した。この点さえ揺るがなければ、残る諸課題は「何とかなる」し、「何とかしなければならぬ」と決意を新たにしました。

とりわけ、「道徳の時間」の特質である「道徳的価値の自覚を深め、自己の生き方についての考えを深める」、「道徳的実践力を育成する」ことは今まで以上に重視されるだろうし、その重要性は今後益々強調されるだろう。したがって、この特質を具現化するための授業研究は引き続き続けなければならないと強く思った。

とは言え、「特別の教科 道徳」（仮称）が実施されるようになると、当分の間は混乱が起こることが予想される。「道徳授業地区公開講座」が始まった時のような混乱、つまり、道徳的価値を押し付け、児童に決意表明を迫る授業、体験活動に終始する授業、具体的な問題行動の解決を図るための授業など、およそ道徳授業の特質から逸脱した授業が展開されることが予想される。そうした混乱を最小限に止めるために、今から備えよ！

（平成 26 年度）

「特別の教科 道徳」（仮称）の最重要課題

後藤 忠

平成 26 年 10 月 21 日、中教審は政府に対し「道徳の教科化」についての答申を行った。

これによって次期学習指導要領から「特別の教科 道徳」（仮称）が新たな枠組みとして教育課程に位置付けられることになった。このことは総じて歓迎すべきことだが、各論において手放しでは喜べない点が多々散見される。その中から、私が特に重要だと考える 2 点を挙げる。

1 点は、本時のねらい（の立て方）である。

「道徳」の授業は、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を養うための授業である。つまりねらいとする価値にかかわる内面的な資質（道徳性）を豊かに養う時間である。このことを目指して行われる。

にもかかわらず、目指すべき「本時のねらい」が依然として抽象的で曖昧なものが多い。「本時のねらい」は授業のゴールを意味する。これでは目標である授業のゴールテープがはっきりと見えず、授業はぶれるし、授業評価すらできない。評価もできないような授業は無責任な授

業である。具体的で、分かりやすいはっきりした「本時のねらい」を立てることが重要である。

2点目は、資料選択である。

資料は児童の内面を映し出す鏡であり、生き方の糧となるものでなければならない。児童の内面に深く響き、常に自己の生き方の拠り所となる資料が望ましい。薄っぺらで軽々しい、教師の下心満載の資料は排除していかななければならない。

(平成 27 年度)

### 型なしの授業の蔓延を憂う

後藤 忠

「型破りな演技は、型を知らずにはできない。型を知らずにやるのは、型なしというのだ」

当代きっての歌舞伎界の名優坂東玉三郎が 14 歳で玉三郎を襲名した時、師匠である守田勘弥氏から言われた言葉である。「奇跡の女形」と呼ばれ、常に新境地に挑み続ける彼が「戒めの言葉」として今もこの言葉を胸に舞台に立つという。

道徳の授業にも、先人たちが血のにじむ努力を重ねて築いてきた型というものがある。

しかしながら、その型を無視した指導方法が今蔓延しようとしている。守田勘弥氏の言葉を借りるならば、「型破りな授業は、型を知らずにはできない。型を知らずにやるのは型なしの授業というのだ」ということになる…。

「守破離」は古来、稽古事、芸事、技などの習得のためのセオリーである。授業とて同じである。まず、守を身に付ける。そこから破が生じ、離に至るのだ。

「特別の教科 道徳」の登場と共に、浮足立った気配が感じられてならない。問題解決的な学習、体験的な学習、議論する道徳、アクティブ・ラーニング…、こういった言葉がよく吟味・検討されないまま勝手に飛び交っている。

いかに時代が変化しようとも、不易なことは「守破離」に徹することの他はないはずだ。

(平成 28 年度)

### 方法より目的を優先して考えよ！

後藤 忠

昭和 33 年の「道徳の時間」特設以来、長年軽視されてきた道徳教育が、今「特別の教科 道徳」(道徳科)として脚光を浴びている。まるで夢のような現実の到来である。

しかしながら、これから始まる夢の幕開けを目前にして、道徳教育の目標や特質を無視した指導方法が思いもよらない所から発信され、都内の多くの学校に混乱と悪影響を与えている。まことに由々しき事態で、残念でならない。

もとより、指導法の研究開発は教師の使命であり、責任である。教師の飽くなき探求心と向上心は教育の原動力であり、人を教える者の誇りであると言える。したがって、道徳教育の真理(本質)を探究し、研究し続けることは教師の極めて重要な営みである。

しかし、その探求は「方法」より「目的」を優先して行われるべきもので、方法は目的達成のための手段にすぎない。

しかし今、声高に聞こえてくるのは方法論ばかりである。その上、それらの方法論の基盤で

あるべき「目的」の中味が、実に曖昧で不確かなのだ。そんなことでよいのか。本末が顛倒している探求など無意味であり、自己満足に過ぎない。

世小研道徳部の研究は「本末を顛倒しない道徳科の探求」にあると考えるがどうか？

(平成 29 年度)

**道徳科が始まる前に(始まってからも)考えるべき2点**

後藤 忠

### **議論する道徳**

この言葉は道徳科の目標を達成する上で鵜呑みにしてよい言葉だろうか？つまり、他者と議論してはたして児童の道徳性は育つかという疑問である。

児童の道徳性は、児童が自己と向き合い、自己を深く見つめ、自己と対話することを通して育つのであって、他者と議論して道徳性が育つとは到底考えられない。

しかし、独善的な自分の考えで満足することなく、他者と考えを交流し、自分の考えを修正したり自信をもったりする学習は必要である。それは話し合いであり、語り合いであって、議論ではない。

### **道徳科の評価**

「道徳科の評価はどうすればよいか？」という質問をよく受けるが、その多くは評価の意義や意味、評価の目的に関心がなく、もっぱら上辺の評価方法や評価文例にばかり向いている。これではだめである。

教師が自分で授業を作ろうとせず、間違いだらけの教師用指導書にすがって、それをなぞっているだけの授業では児童の道徳性は育たない。下手でもよいから道徳科の目標にかなった、自分で作った指導案で授業を行うことが大事である。そうすれば評価は自ずから付いてくる。

(平成 30 年度)

**道徳科の誕生を、道徳授業を見直す絶好の機会にしよう**

後藤 忠

道徳の教科化は「道徳の時間」の教科化である。

教育課程上の「道徳の時間」の位置づけが「領域」から「特別の教科」に変わったが、「道徳の時間」の特質や目標の授業の本質まで変わったわけではない。このことを深く理解し、意識しなければならない。(このことは「小学校学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳 第1目標」に明確に書かれている。)

その共通理解に立たないと、いかなる指導法の議論も空論となる。「何のためにその指導法を用いるのか。その指導法で児童の道徳性は本当に育つのか。」このことを常に意識して研究活動に当たらなければならない。

今まで「道徳」は一般からあまり注目されず、(それをよいことに)各研究会は内輪にしか通用しない独りよがりな偏った研究を行ってきた傾向があったと思う。もはやそんなことが許される時代でなくなったのだ。道徳科の誕生を、今まで当たり前と思ってやってきた道徳授業を見直す好機ととらえ、一般の教員からも十分理解・納得が得られる分かりやすく、深い研究を行うことを期待する。

(令和元年度)

**仏を作ったなら魂を入れなければならない！**

後藤 忠

平成 27 年の学習指導要領の告示以降、道徳の専門家として著名な方々が、こぞって今までの道徳は「時代遅れの古い指導法だ」と決めつけ、これからは「問題解決的な学習や道徳的行為に関する学習、考える道徳、議論する道徳が主流になる」といった、いわゆる「新しい道徳」を煽る動きが急速に活発化した。それに煽られて、今まで道徳教育を忌避し、何もしてこなかった教育委員会や学校が浮き足立ち、節操もなくこうした耳新しい言葉やでたらめな指導法に飛び付いて、「評価、評価」と右往左往している現状がある。

こうした事態を引き起こしてしまった責任の一端は、「今まで道徳の授業をちゃんとやってきた」と言っている教師にもあると思う。子供に学び、授業改善(評価)を重ねるといふ真摯な研究姿勢を怠り、独善的で誰からも関心を払われないようなつまらない授業を漫然と繰り返し、あるいは間違いだらけの教師用指導書をただなぞるだけの手抜き授業を続けてきた結果、「道徳」の魅力を他の教師たちに伝えられなかった責任は極めて重いと思う。

いずれにしても「道徳」の魅力は、教師が子供への思いを込めて全力で行う授業の、子供が学ぶ姿で伝えなければ他者には届かない。仏(道徳科)を作ったなら魂(教師の思い)を入れなければならない。